第 22 回「金融と経済を考える」高校生小論文コンクール

特選　日本銀行総裁賞

「私の投資物語」

新潟県・新潟県立新潟高等学校　2 年　高橋　くらら

「私に投資してほしい」。そんな突拍子もないことを言ったのは中学生になったばかりの頃。突然の私の言葉に母は驚いた顔をした。

私がはじめて投資に興味を持ったのは小学校低学年の頃。きっかけは、80歳を超える祖母から聞いた話だった。祖母は

「お金は貯めてるだけじゃだめ。世の中のために活かさなきゃ」

と言い、若い頃から応援したい会社に積極的に投資をしていたという。今でも現役で働いている祖母は、そのおかげで老後の心配なく暮らしている。将来を見据えてお金を運用することに幼いながらも夢があると思った。

祖母の経験を聞いてから、投資という行為が持つ意味や可能性に興味を持つようになった私だったが、祖母の投資のせいで生活が苦しかった時期があったと、投資に対して否定的な考えを持つ母の前では何も言えずにいた。

中学生になると、母は私を塾に通わせるために家計をやりくりしはじめた。私は自分でスケジュールを考えて勉強したいという思いがあったが、母は塾に通っていれば安心だという親ならではの考え方を変えられずにいた。月に約３万円の塾代はけして安くはないと私にもわかった。母が必死にやりくりをして私に通塾させようとお金を工面していることは嬉(うれ)しかったが、もっと有効なお金の使い方があると考えた。そこで私は投資してもらう立場にたち、私自身をプレゼンしてみようと考えた。企業であれば利益という形で還元されるが、私はそれを学びの蓄積による成長とした。学びは学問だけではない。ボランティアや幼いころから習っている水泳や空手による心身の学びも含まれる。私は学習計画表、必要なボランティア、空手の練習メニュー計画表と共に、将来設計書を母に提示した。

まずベースは学校の授業の予習復習を欠かさず、わからないことはその日のうちに先生に質問することで学力は維持できると約束した。中学生のうちはオン

ラインで先取り学習のための通信教育が年２万円、模試や英検で年４万円。苦手教科は市販の参考書を図書カードで購入。図書カードは小論文などのコンクールの副賞で頂いたものを活用する。小論文を書くことは大半が苦しい。それでも人工知能に頼らず、自分の考えを文章に乗せることができたとき、それは何より楽しく自己成長に繋(つな)がると思っている。また、ボランティアは月に１日、空手は安価な市民体育館を利用し道場に通いつつ、土日は個人練習をかさね全国大会出場を目指す。私は身体を鍛えることで心も鍛えられ、勉強に集中できると考えている。これらの費用を概算すると１か月約8,000円が必要となる。意を決した私は

「月１万円を私に投資してほしい」

と母に提案した。はじめは驚き、そして笑いながら本気にしなかった母だったが、私の細かな計画書に目を通すと

「ほんとうにできるの？」

と興味を持ってくれた。１万円はけして安くない。だが、私の学力維持、向上のための投資と考えてもらう。もちろん余ったお金も無駄にはせず、毎月貯蓄し、大学の受験期の費用に充てられると説明した。自信があるというより、お金を活かして自分の成長に繋げてみたかった。単に周りがそうしているからやる、という理由で大切なお金を消費したくないと思った。

母からの投資がはじまった当初は不安もあったが、自分自身の将来設計が明確になったことでやるべきことが整理された。また、投資をしてもらったという責任感が生まれ、成果を見せたいというやる気に繋がったことを実感した。やっぱり投資って悪くない、そう思えた。

無事に希望の高校に進学した私だが、ここでも母は再び迷い始める。成績が少し落ちただけで、塾のパンフレットを取り寄せる母に言った。

「もっと私を信用してほしい」

そんな私の声は、今の日本の多くの企業が抱えている想いと共鳴する部分があると感じた。景気が悪く、円安や物価高など様々な経済的な問題が取りざたされる現代。何を買うにしても値上がりが当たり前で、財布の紐を締めることは自然な反応だ。しかし、そんな時こそ企業を投資する形で応援すべきと考える。投資には確かにリスクが伴うが、自分が応援したい企業が成長し、発展してく

©J-FLEC2024

れることがあれば、それは損失ではなく利益と言えるのではないだろうか。はじめは葛藤するかもしれないが、長い期間を掛けてでも成長してくれたなら嬉しい。この過程はまるで子育てのようなものだと思った。

祖母は今でも投資を続けている。その企業は喘(ぜん)息の治療薬を開発しているのだと教えてくれた。それは、幼いころに喘息で苦しんでいた母の姿が忘れられないからだという。きっと祖母は少しでも喘息で苦しむ子供がいなくなるようにと願っているのだろう。実はそのことを母はまだ知らない。子供を思う気持ちは、祖母も母も同じだと思った。

私の投資物語はまだはじまったばかりだが、少しずつ蓄積された成長の成果も現れている。今年、念願だった空手でインターハイへの切符も手に入れ、何より充実した高校生活が送れているのは、私の成長を喜ぶ母の笑顔が背中を押してくれているからだ。投資は、お金を増やすだけでなく、社会に必要な企業を支援し、成長させることでもある。

私の投資物語が新たな段階を迎えるとき、祖母や母のように、誰かの支えとなるようなお金の使い方を考え、社会全体に良い影響を与えることを目指したい。

©J-FLEC2024